

漢代五言詩歌史の研究

柳川, 順子

<http://hdl.handle.net/2324/1398443>

出版情報 : Kyushu University, 2013, 博士 (文学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



区分	乙
----	---

論文題目

漢代五言詩歌史の研究

氏名 柳川 順子

論文内容の要旨

本論文は、古詩と総称される漢代詠み人知らずの五言詩群について、隣接する詩歌との関係性にも言及しながら、その生成と展開の経緯を明らかにしたものである。古詩は、中国文学の主要ジャンルの一つである五言詩の元祖と目される作品群であるが、漢代に近い六朝時代末においてさえ、すでにその始原は未詳とされていた。他方、漢末の建安文壇に至ってにわかに興った署名付きの五言詩が、古詩に近似する表現を多く含んでいることは誰もが認めるところだ。このため、従来の説では、古詩の成立は建安文壇の形成時期に近い後漢後半期と見られていた。本論文は、この定説の形成過程、及びその論拠を洗い出した上で、これに替わる次のような新見解を提示する。

まず、古詩の中には古くから別格視されてきた一群が存在する。その詩群の輪郭を示すならば、六朝時代初めの陸機が「擬古詩」の模擬対象に取り上げ、かつ六朝末の詩論『詩品』において無条件に絶賛され、なおかつ同じ六朝末に成った詞花集『玉台新詠』に枚乗の「雑詩」として収録される諸篇だと言うことができる。この一群は、多くの古詩が出揃った後に選りすぐられた佳作集なのではなく、五言詩展開史上、比較的早い段階でまとめられたものであり、各篇の成立時期はそれほど拡散しないと判断される。これを第一古詩群と名付けよう。そして、この特別な古詩群に属する一篇の詩が、後漢初期の傅毅の「舞賦」の中に、明らかな典故表現として踏まえているのを認めることができることから、少なくとも第一古詩群に限っては、その多くが後漢時代の初め頃には既に成立していたと判断される。(第一章)

それでは、古詩の源流はどのあたりまで遡り得るだろうか。第一古詩群に属する諸篇は、宴席に離別の悲哀感情を提供する諸篇と、それを享受する宴という場そのものを詠じた諸篇とから成り立つと捉えることができる。前者は後者に先んじて成立していたと見るのが妥当だろう。他方、別れを詠ずる前者の詩が、八句か十句、もしくはその二倍の句数から成るのに対して、後者の宴の詩にはこの法則性が認められない。詩は元来、音楽と共に詠われる文芸であったことを踏まえると、より原初的な古詩は、第一古詩群の、句数に法則性を持つグループの中でも、八句か十句から成るものの中にあるはずだ。かくして割り出された古詩は、いずれも男女の離別の情を詠うものである。そして、その特徴的な語句や描出された事物から、それらの誕生は、前漢後期、後宮の女性たちを交えた遊宴空間においてであったと推定される。(第二章)

だが、第一古詩群の中には、友情の崩壊、出世への意欲、人生の無常など、恋情を詠ずる原初的古詩からはかけ離れたテーマを詠ずる諸篇も存在する。このような諸篇が、比較的短い期間の中に出現し得たのはなぜだろうか。鍵を握るのは、それらが詠じられた場である。原初的古詩を生み出した遊宴は、前漢中期以降、奢侈な社会風潮の広がりによって、宮廷外でも私的なそれが盛行し、そこには世に出る機会を求める無名の知識人たちが蝟集していた。古詩の担い手は、この宴という場を介して、後宮の女性たちから男性知識人層へ広がっていったと考えられる。他方、同じ時期、死生観の変質に伴って、死者の住む陵墓の傍らでも世俗的な宴席が催されるようになっていった。死後の世界に言及する古詩は、このような空間で生まれたと推測される。(第三章)

第一古詩群を構成する個々の詩は、上述のような生成展開の末に、後漢前期の章帝期頃、一つの作品群にまとめられたと考えられる。この詩群の作者として、前漢の文人枚乗の名が冠せられたのはこの時だろう。ちょうどこの時期、枚乗の創始した文学ジャンル「七」がにわかに関心されている。その人の作と銘打たれ、一連の作品群に編成された古詩は、知識人社会において、かつてない強い伝播力を獲得したはずだ。後漢中期以降、作者名の明らかな五言作品が急激に現れる不可思議は、こうした出来事を想定してこそ氷解するだろう。また、古詩との近似がしばしば指摘される、前漢の李陵と蘇武の名に仮託された一連の五言詩群も、この第一古詩群の編成時期と同じ頃、文人たちの集う宴席を舞台に作られたものだと割り出すことができる。(第四章)

ところで、従来、古詩との関係が論じられてきたジャンルに、古楽府と総称される漢代俗楽歌辞群がある。だが、「相和」と「清商三調」とに大別される古楽府のうち、古詩との間に直接的な影響関係が認められるのは、実は後者に限られる。古い由緒を持つ特別な歌曲群「相和」とは異なって、「清商三調」歌辞は、宴席で行われる俗楽の替え歌である。この俗楽歌辞と古詩とは、後漢のある時期以降、宴という場を介して相互に乗り入れるようになった。その結果が、両者間で共有される類似句なのだとは推定される。従来は、民間歌謡である古楽府が洗練されて、無名文人による古詩が成ったと推論されてきたのであったが、この通説は見直す必要がある。(第五章)

古詩を中心とする漢代五言詩歌は、辞賦や四言詩といった正統派文学に平行して、宴席という娯楽的空間を舞台に展開してきた副次的な消閑文芸であるが、これを文学の表舞台に引き上げたのが漢末の建安詩人たちである。彼らの作品やその文学活動には、紛れもなく前代の宴席文芸の延長線上に位置づけられるべき要素が認められる一方、そこから外れる部分は、これより始まる中世貴族社会の徴候を示している。この文学史的変遷は、建安文壇の企画者である、後の魏の武帝曹操の、統治者としての卓越した先見性によって企てられたものであった。(第六章)

さて、五言の詩型は、先行研究により、南方の長江流域の俗謡に発祥することが明らかにされている。だが、この地域に位置する三国呉の知識人たちは、身近な民間歌謡に脈打つ五言のリズムに価値を認めず、上述のような中原の文学的新動向にも無関心であった。ところが、祖国の滅亡後、彼らが参入した中原の貴族社会では五言詩が盛行しており、その中でも別格の一群は、前漢初期の南方出身の文人、枚乗の作とされている。このことを明敏に受けとめたところに成ったのが、第一古詩群のみをまるごと模擬対象とする、呉人陸機の「擬古詩」であった。(第七章)

以上のような論述内容を持つ本論文は、これまで見過ごされてきた漢代文学の隠れた一面を切り出し、この漢代五言詩歌を継承して展開した六朝時代の詩歌について、その本質を歴史的に捉えるための基礎的考察材料を差し出すものである。

*本論文は、『漢代五言詩歌史の研究』として、平成25年(2013年)2月28日、創文社から刊行された。